

## I 基調講演

# 査読を受けるということ — editor/referee との対話 —

米 山 正 樹  
東京大学

## I はじめに

本稿は、2024 年 6 月 8 日に青山学院大学で開催された第 3 回 JAIAS カンファレンスにおいて、JAIAS 年報編集委員長として行った基調講演の内容を要約したものである。当期の年報編集委員会は、これまでとはずいぶん異なる方針にもとづき学会誌の編集を行ってきた。変更した編集方針の概要と変更の理由を学会員の間で改めて共有するとともに、掲げた目標がどれだけ達成できたのかを総括しておくことは、きたる役員改選で新たに選出される編集委員会のメンバーにとって有用であろう。こうした考えから、基調講演の形でこれまでの編集活動を総括したのが本稿である。なお、当日使用した報告資料は、当面の間、カンファレンスのウェブサイト (<https://sites.google.com/view/jaiasconference2024/>) において開示している。

## II JAIAS 年報編集方針の変更： 概要と背景

前期までの編集委員会のもとで、意欲的な投稿者と献身的な査読者および編集者に支えられた JAIAS 年報は、学術的に優れた論文を数多く世に送り出してきた。その貢献は大いに称

えられるべきものといえるが、他方で、客観的だが融通性を欠く査読基準が硬直的に運用されてきた結果、年報の survival rate (投稿数に対する掲載可となった論文数の比) は、同誌の世間的な評価とくらべて低い水準にとどまっていた。低い採択率は、学会員が年報に投稿しようとする動機を損なっているおそれがあった。採用人事や昇格人事において査読誌への実績が重視されるようになって以上、他の条件が一定であれば、投稿数は放っておいても増加すると見込まれる状況下において、そのような事実が観察されない事態を、2021 年に発足した新たな編集委員会は深刻なことと受け止めた。

年俸を取り巻く重要な環境変化としては、このほか、会計研究者数の趨勢的な減少も指摘に値する。減少しつつあるパイを会計関連の各学会が奪い合う状況は、各学会の学会誌に係る編集体制が強化されるにつれて明らかとなってきた。JAIAS 年報よりも早い段階において世間的な評価を高めることに成功しているいくつかの学会誌との競争に勝ち抜くためには、他の学会誌との差別化を図るため、恒常的に一定規模の会計研究者を惹きつけられる明確な編集方針、他誌とは明確に異なる編集方針を確立する必要が生じていた。JAIAS 年報の編集作

業に携わってこられた先人達の「遺産」を継承しつつも、必要に応じて大胆な変革を断行したのは、ひとえに、こうした環境変化に対応するためであった。

### III editorial policy とその達成手段

#### (1) editorial policy の改訂と editor の権限強化

JAIAS 年報が直面している競争環境に係る編集委員会の認識は、前節に記した通りである。こうした認識にもとづき、2021年に発足した編集委員会は、JAIAS 年報を若手研究者（院生会員を含む）が査読誌への投稿を行う際の登竜門と位置付けた。「査読誌に掲載されるためのテクニク」を身に着けるための早道は、みずから当事者となって査読経験を積むことであろう。この事実に鑑みれば、若手研究者による粗削りな投稿論文を門前払い(rejection)にしてしまうのではなく、修正を通じて掲載可能な水準に達する可能性が閾値を超えている限り、できるだけ rejection を避けて査読を継続することが若手の育成に結びつく<sup>(1)</sup>。

このような観点から、編集委員会は就任直後に、「査読制度に関する申し合わせ」およびこれに関連する会則を改め、初回の投稿段階でまだ掲載水準に達していないものの、修正次第でその水準に達しうる投稿論文について査読を継続するための要件を緩和した。これと併せて、editor の集合体としての編集委員会が有する権限を強化した。これは「査読結果を甘くしてしまうと、投稿論文が抱えている欠点を見抜けなかった査読者だという評価を受けてしまうかもしれない」というバイアスを多くの査読担当者が抱えていることに配慮したものである。

査読担当者の評価を形式的にそのまま受け入れるスキームでは、たとえ上記のようなバイ

アスを伴う評価であることが査読結果報告書の記述から明らかであっても、査読担当者の付した評点に従うしかない。掲載可能な水準に達しうる投稿論文がこのような理由から初期段階でリジェクトされる事態をできるだけ避けるため、編集委員会は、「査読担当者の評価は最大限尊重するが、査読を継続するかどうか、また掲載するかどうかに係る最終的な権限と責任は編集委員会にある」としたうえで、査読担当者の評価結果を編集委員会が覆す可能性もあることを明示した。

こうした決定を下した時点において、JAIAS 年報編集委員会は、日本における会計分野の学会誌で editor が最も強大な権限を有する組織に改組されたのではないかと自負するところである。もちろん、このような権限の付与は、editor があらゆる領域の研究に関する十分な知見を有し、公平な判断を下すのに必要な資質を備えていなければ許されるものではない。この3年間、あらゆる批判を跳ね返せるほどの知見と資質をもって編集作業を行ってきた、などという自己弁護はできない。とはいえ編集委員会は、強力な権限と表裏一体の関係にある責任を強く意識しながら編集作業に取り組んできた。その活動に対する評価は後世に委ねるしかない。

#### (2) ファスト・トラック制度の導入

編集委員会が試みたもう1つの変革は、JAIAS カンファレンスを開催するとともに、カンファレンスにおける報告論文を年報のファスト・トラックに載せる可能性を開いたことである。ここでいうファスト・トラック制度は、JAIAS カンファレンスでの報告が許可された論文を対象として、通常よりも迅速に査読手続を進め、より迅速に最終的な掲載可否の判断を下すスキームを指す。

JAIAS カンファレンスは、かつて開催されてきた JAIAS 東日本部会・西日本部会に代わる研究集会として 2022 年度に導入されたものである。立ち上げに際し、カンファレンスの開催趣旨や開催形態は研究担当理事を兼ねる年報の編集委員に委ねられた。そこで編集委員会では、ファスト・トラック制度の導入によって年報への投稿とカンファレンスを結び付け、双方の活性化を図ることとした。すなわちファスト・トラック制度の導入によって投稿論文の増加を期待するとともに、通常の査読手続との比較においていっそう多様なコメントが投稿論文に寄せられることを期待したのである。

通常の査読手続においては、投稿論文を精読し、内容改善のためのコメントを返すのは 1 名から 2 名の研究者に限定される。いうまでもなく、長期にわたって投稿論文と真摯に向き合ったシニア研究者から寄せられたコメントは、少数であっても投稿論文の質的改善に資するものである。とはいえ、投稿論文に対する「多面的・多角的な検討」を通常の査読手続に期待することはできない。これに対しカンファレンスでは、背景（研究・教育履歴）が大きく異なるシニア研究者からの多様なコメントを期待できる。主として指導教員やメンターとの対話を通じて論文を作成しており、学界での人脈が狭い若手研究者にとって、そのようなコメントは、研究に係る「視野を広げる」効果を期待できる点で貴重であろう。新設されたカンファレンスにおいてファスト・トラック制度を導入したのはこうした考えによるものである。

#### IV 目標の達成状況

JAIAS 年報に係る一連の変革の目的は、JAIAS 年報への投稿を促すとともに、掲載可能な水準にまで質的な向上を図りうる投稿論文につい

ては、できるだけ査読を継続することによって survival rate を適正な水準にまで高めることにあった。査読に関する申し合わせを改訂して editor の権限を強化するとともに、カンファレンス報告論文をファスト・トラックに載せることにしたのは、上記の目的を達成するための手段であった。この節では、ここに掲げた目標が達成されたかどうかを総括する。

まずは新設したカンファレンスが投稿論文数や最終的な掲載論文数に及ぼした影響である。カンファレンスにおける報告論文数は第 1 回（2022 年度、於早稲田大学）が 3 本、第 2 回（2023 年度、於関西学院大学）が 2 本、第 3 回（2024 年度、於青山学院大学）が 3 本であった。カンファレンスの存在が JAIAS 会員に十分浸透していなかったこともあり、カンファレンスは小規模の集会からスタートしたが、第 3 回に至って参加者はずいぶん増加した。いずれのカンファレンスにおいても、それぞれの報告論文に対してディスカッサントから示唆に富むコメントが寄せられた。加えて第 3 回においてはフロアーからもコメントが寄せられた。「背景が異なる学界関係者から指導教員やメンターとは異なる視点に立ったコメントを受け、研究テーマや研究手法の選択において多様な立場がありうることを知ってもらおう」というカンファレンスの目的は、徐々に浸透しつつあるとあってよい。

次にファスト・トラックの運用状況である。第 3 回カンファレンスまでの累計報告論文 8 本のうち、ファスト・トラックを経て年報に掲載されたものは 4 本、ファスト・トラックに載せたものの、結果的に通常の査読と同様の期間を経て掲載されたものは 1 本であった。投稿数に対する最終掲載数の比率は、カンファレンス報告論文が通常の投稿論文とくらべて有意に高い。サンプルが少ない状況下で一般的な結論を

引き出すことは慎むべきだが、上記の事実は、カンファレンスの開催が年報に最終掲載された論文数の増加、および採択率 (survival rate) の上昇に寄与した可能性を示唆している。

もちろん、すべてが順調に推移しているわけではない。査読を受けることに必ずしも慣れていない投稿者を惹きつけ、若手の登竜門と位置づけた年報の査読手続きを、投稿者、査読担当者、編集者および年報の読者すべてにとって有益なものとするためには、いくつかの改善点が残されている。3年間の編集経験を通じて痛感していることの1つは、査読を行うこと(受けること)の意義に関する標準的な大学院教育が確立されていない日本で「査読の登竜門」という役割を引き受けると、「査読の作法」とでもいべきガイダンスやインストラクションが不可欠だということである。

当初編集委員会は、査読の目的とは何か、査読担当者からのコメントにどう回答すべきか、などの諸点については、特別な説明を行わなくても暗黙知として投稿者と共有できるだろうという見通しを立てていた。実際には、これらの基本的な事項についてさえ、一部の投稿者とは認識が食い違っていることに気づくまで長い時間を要しなかった。無償で査読を引き受けてくれる担当者に迷惑をかけないためにも、「査読を受ける際に踏襲すべき作法」をマニュアル化し、その内容を理解している旨の了解を投稿者からとりつけておくなどの対応が、喫緊の課題となっている。

## V おわりに

最後に、編集委員および編集委員会の3年間にわたる活動を明に暗に支えてくれた方々に対する謝辞を申し述べたい。まずは編集委員に対する信頼のもと、学会本体から独立した組織として編集委員会を運営することをお認め下さった小西範幸会長に感謝したい。またこの場では氏名を公表できないが、匿名のレフェリーとして査読を担って下さった先生方、およびJAIASカンファレンスでディスカッサントを引き受けて下さった先生方にも感謝を捧げたい。学会活動の活性化や学問の進歩・発展がレフェリーやディスカッサントによる無償の貢献によって支えられていることを痛感した3年間であった。

そして最後に、編集委員として3年間にわたり苦楽を共にしてこられた草野真樹先生、角ヶ谷典幸先生、古庄修先生、山地範明先生(アイウエオ順)および豊岡博先生(編集委員会付幹事)にも感謝したい。心が折れることなく任期を全うできたのは、先生方のおかげである。今後も先生方を同志と呼ばせていただきたい、という願いを以て基調講演を終えることとする。

### 注

- (1) いうまでもなく、本文に記した内容は、若手を甘やかすことを意味しない。「最初からレフェリーのコメントによって論文が改善されることを期待した投稿」、すなわち「本来原著者が果たすべき責務を果たしていない投稿」については、リジェクトすることで投稿行為を規律づけなければならない。